

惟光の役割

——〈乳母子の徳〉を中心に——

吉 海 直 人

一、惟光について

必ずしも物語の主要人物とは言えないけれども、光源氏の腹心の部下として活躍している惟光について考えてみたい。この惟光については、ほぼ乳母子の代名詞・典型の如くに思われており、忠実な部下であると同時に光源氏の乳母子であることが、惟光という人物を考える際の重要なポイントになっているようである。しかしながら従来の研究では、あくまで家司あるいは従者という観点から論じられており、乳母子であることは付け足してしかなかった。¹⁾ 本稿では、逆に乳母子であることに重点を置き、むしろ単なる家司・従者との相違を明らかにしていくつもりである。

ただし肝心の乳母子については、『源氏物語』においてただの一度も惟光を「乳母子」と規定していないことをまず確認しておきたい。従来は源氏の乳母（大式乳母）と惟光が親子であるところから、安易に乳母子と認定していたわけである。しかし乳母の子が必ずしも乳母子とは限らないことは、既に実例をあげて論じた。²⁾ 夕顔巻を見ると、大式乳母の家には惟光の兄弟達（兄の阿闍梨・姉妹）も集っていたが、何故その中で惟光だけが乳母子であり、他の子供達は乳母子と見なされないのかは明白にしたいのではないだろうか。

それはさておき、惟光を乳母子と認定することにさほど異論はなさそうである（というより乳母子でなくては都合が悪いのかもしれない）。その乳母子という視点から言えば、惟光の人

物像に『落窪物語』の惟成が投影されていることにも疑問の余地はあるまい。⁽³⁾それは単に乳母子であること、実名で表記されていること（全用例48例）のみならず、惟成と惟光という名前の類似までもあげられる（惟成のパロディで光源氏の乳母子だから惟光ノ）。そう考えると、夕顔巻において惟光が「私の懸想もいとよくしおきて」（完訳日本の古典 源氏物語一122頁、以下同じ）源氏を通わせている点、惟成とあこぎの関係が先にあって、少将を落窪の姫君に導くことと一致する（もし惟光が夕顔の乳母子右近と恋仲であれば、あこぎとのかかわりにおいて一層強化できる）。こういった前提を踏まえた上で、夕顔巻以降の惟光の活躍を検証していきたい。

二、惟光の活躍——夕顔巻を中心に——

惟光が初めて物語に登場するのは夕顔巻であり、それ以前の巻にはその存在さえも記されていない。しかしながら帚木・空蟬巻は夕顔巻の並びの巻（帚木三帖）とされておき、両巻が時間的に重なるとなると、母（大式乳母）の看病時ともかくとして、それ以外は本文に書かれていなくても、当然のこととして惟光の存在を想定してもいいのではないだろうか。「忍びた

まひける隠ろへごと」（一帚木巻43頁）に信頼のおける乳母子が付きものだとするれば、本来ならば「六条わたりの御忍び歩き」（二夕顔巻109頁）にも、惟光が影のように付き従っていきしかるべきであろう。惟光が源氏の手足であり分身であるとすれば、たとえ本文に書かれていなくても、だからといって積極的に不在であると考えする必要はあるまい。

同様のことは末摘花巻において一層顕著に窺える。若紫巻にしばしば登場しているにもかかわらず、続く末摘花巻には惟光が全く描かれていないからである。しかし若紫・末摘花巻はやはり並びの巻であり、両巻が時間的に重複するのであれば、逆に末摘花巻における惟光の不在を証明することの方が難しいのではないだろうか（唯一、大式乳母の死による服喪が考えられるが、それなら若紫巻も同様のはず）。

このことは蓬生巻に至って明白になる。須磨流涕から帰京した光源氏が、偶然荒れはてた末摘花邸の前を通りがかった際の本文に、

例の、惟光は、かかる御忍び歩きに後れねばさぶらひけり。
召し寄せて、「ここは常陸の宮ぞかしな」、「しかはべる」と聞こゆ。「ここにありし人はまだやながむらん。とぶら

ふべきを、わざとものせむもところせし。かかるついでに入りに消息せよ。よくたづね寄りてをうち出でよ。人違へしてはをこならむ」とのたまふ。
(三蓬生巻156頁)

とある。この会話は、惟光がその邸に末摘花が住んでいることを熟知している——換言すればかつて源氏のお供でここに通ったことがある——ことを前提としてはじめて成立するからである。⁽⁴⁾それは本文中の「例の、惟光は、かかる御忍び歩きに後れねばさぶらひけり」という草子地によって一層補強されるであろう。

特に惟光のキーワードとして、蓬生巻もそうであるが、「例の」と冠されることが非常に多いことをあげておきたい(全七例)。

- 例の大夫、随人を具して出でたまふ。(一夕顔巻144頁)
- 例の御供に離れぬ惟光なむ、(一若紫巻183頁)
- 例の、大夫をぞ奉れたまふ。(同205頁)
- 例の惟光入れたまふ。(二花散里巻204頁)
- 例の親しきかぎり四五人ばかりして奉りぬ。(三明石巻67頁)
- 惟光朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろいろひ仕うまつる人

なれば、

(四松風巻14頁)

こうしてみると惟光は、単に光源氏の側に控えているというだけでなく、私的な手紙の使者となったり、三日夜の餅を用意したり、旅先で筆記用具を準備したりと、秘書的な役割を果たしていることがわかる。換言すれば、夕顔巻における母の重病といった状況設定でもない限り、惟光は常に光源氏の周辺に存在していることが物語の前提条件となっているのではないだろうか(不在の場合はそのことが明記される)。

三、惟光の活躍——若紫巻を中心に——

ここで惟光の一生を簡単に辿ってみよう。「源氏物語」において惟光が登場している巻を調べたところ、夕顔・若紫・紅葉賀・花宴・葵・花散里・須磨・明石・滯標・蓬生・松風・少女・梅枝と、実に十三巻(第一部のみ)の長きに亘っており、これだけでも単なる端役では済まされない役割を担っていることが容易に納得される(惟光に限って言えば、紫の上系・玉鬘系の区別は適用できないように、むしろ登場の有無によって夕顔↓若紫と帚木・空蟬↓末摘花に区別できる)。特に夕顔巻においては、夕顔の宿の情報収集はもとより、六条某院における夕

顔怪死の後始末も見事にこなしている。⁽⁵⁾ただしそれは「夜半、暁といはず御心に従へる者の、今宵しもさぶらはで、召しにさへ怠りつるを憎しと思す」(一夕顔卷188頁)という大失態を帳消しにするためでもあつたらう。もつともこの場合は、惟光の不在によつてかえつてその存在の重要性——いかに源氏が惟光を頼りにしているか——が浮き彫りにされているとも言える(例の教養のある随人では代役を務められないようである)。

また若紫巻においては、「御供に睦ましき四五人ばかり」(同163頁) いる中で、「人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば」(同168頁)と唯一垣間見に奉仕しており、また僧都側でも「僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす」(同172頁)と当然のごとく惟光をパイプ役に指定している。ここには良清等もいたはずであるが、源氏の第一の部下として惟光が特別の存在——乳母子——であることは、公私に互つて周知の事実なのであろう(あるいは物語がそう規定している?)。ともかくそういつた縁により、⁽⁶⁾以後紫の上に関する全てを惟光が担当している。ここでも夕顔巻における「惟光が預かり」(一121頁)同様の密命を帯びているわけである。

面白いことに、最初源氏が北山に手紙を送つた際(一若紫巻

惟光の役割

186頁)は、誰が使者の役目をしたのか記されていない。ところがその返事がはかばかしくなかつたので、源氏は「口惜しくて、二三日ありて、惟光をぞ奉れたまふ」(同187頁)と、惟光を直々に指名しているのである。ここでは単に惟光が手紙の使者になつたというのではなく、惟光を抜擢したことに源氏の並々ならぬ熱意が込められていることを読み取つておきたい。尼君側にも当然そのことは看取されたであらう。だから今度は「わざとかう御文あるを、僧都もかしこまり聞こえたまふ」(同188頁)のであつた。こうして惟光は手紙の使者としてしばしば往復することになり、源氏の知らない尼君邸の所在まで熟知することになる。そのみならず源氏の代弁者として少納言にも「くはしく、思しのためさま、おほかたの御ありさまなど語る」(同頁)と熱弁をふるつており、桐壺巻における鞍負命婦的な役割を果たしていると言えよう。

ついでながら夕顔巻においては、惟光の相手役として乳母子の右近が登場していた。紫の上の場合は、少納言の乳母が設定されている。また末摘花においては太輔命婦と侍従が登場しており、恋愛における男君側の乳母子と女君側の乳母・乳母子という対構造が想定される。その延長として、紫の上を連れ出す

際も「惟光ばかりを馬に乗せておはしぬ」（同207頁）とあるし、二条院到着後も「惟光召して、御帳、御屏風など、あたりあたりしてたてさせたまふ」（同209頁）のであった。源氏は「しばし殿の内の人にも誰とも知らせじ」（二葵巻52頁）と紫の上のことを秘密にしており、だからこそ「惟光よりほかの人は、おぼつかなくのみ思ひきこえたり」（同頁）とあるように、秘密保持のためには夕顔の葬儀の折のように、惟光が表面化・活躍せざるをえないのである（呼称の多出）。

葵祭の見物においても「惟光に車のこと仰せたり」（同108頁）と命じており、信頼される乳母子は多忙のようである。紫の上との新枕の折も、源氏は三日夜の餅を惟光に依頼しており、その際惟光は「心ときき者にて、ふと思ひよりぬ」（同139頁）と即座に了解している。この「心とき」は特に男女間の機微に関してであろう。もちろんここでは惟光の利発さに眼目があるのでなく、やはり源氏にそこまで信頼されていることをこそ読み取っておきたい。

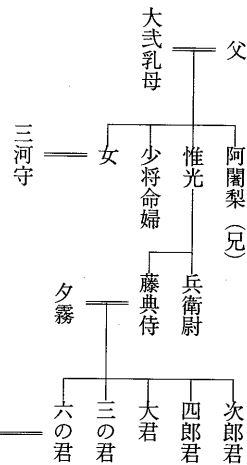
四、惟光の活躍——須磨流謫を中心に——

しかしながら惟光は、決して打算的に源氏に仕えているわけ

ではなかった。それは源氏の須磨流謫（『伊勢物語』の東下り譚を投影）というリトマス試験紙によって明確にされる。加えて明石巻に至っても、惟光の出番はちゃんと用意されていた。初めて源氏が明石の君に通う場面に、「惟光などばかりをさぶらはせたまふ」（三84頁）とあり、従来通り惟光が付き従っているのである。ここでも明石の君との連絡役は惟光に任ざれており、その縁で濤標巻における住吉参詣の際も、惟光が両者の仲介役となっている。どうも惟光は、政治的あるいは家司としての事務的な仕事ではなく、源氏の私的な恋愛場面においてのみクローズアップされ、見事にその才能を発揮しているようである。

ところで惟光のような男の乳母子の場合、養君たる光源氏は私的な主君であるということに留意しておきたい。つまり乳母子には常に官職上のもう一人の主人（上司）が存するからである。『落窪物語』の帯刀など、公的な主人とおぼしき藏人少将の供をして中納言邸を訪れ、そこであこぎと恋仲になっていた。そしてあこぎから落窪の姫君の存在を知らされ、それを私的な主人たる道頼に報告しているではないか。惟光にとっても、源氏は官職上の直接の上司ではなかったはずである。

〔惟光一族の系譜〕



そうすると乳母子の場合、公的な主人や仕事にどれだけ熱心だったかはあまり問題にならず、それよりもむしろ乳母子としてどれだけ私的な主人（養君）に尽くしたかの方がより重要であることになる。惟光など夕顔や紫の上といった光源氏の私的な恋愛体験に常に奉仕しているわけだし、前述のように須磨流論に際しては、なんと大事な公職をすら放棄して源氏の供をしているのである。それが源氏に評価されているからこそ、帰京後に源氏の引き立てによって出世するわけである。つまり光源氏の乳母子としての働きによって、普通以上の優遇措置が執行されていると考えられる。

ついでながら惟光の場合は、なんと親子四代（乳母―惟光―子供―孫）に互って物語に登場しており、まさに一家をあげて源氏に奉仕していることがわかる。系図面からだけでも、単なる端役では片付けられない登場人物であることが明示されていることになろう。

五、惟光の活躍——清標巻以後——

ここで参考までに惟光の官職の推移を調べてみると、大夫（夕顔）↓民部大輔（須磨）↓摂津守兼左京大夫（少女）↓宰相

惟光の役割

（梅枝）と推移していることがわかる。須磨巻においては民部大輔（正五位上相当）であったようだが、それを投げうってまで源氏の須磨下向の供となった。信賞必罰の原則からすれば、源氏召還の後は、源氏の官位上昇と正比例して、惟光の官位も急上昇しても良さそうであるが、実際には少女巻に至ってようやく「津の守にて左京大夫かけたる」（四四七頁）とあるように、左京大夫（正五位上相当）として登場しており、須磨下向の際に放棄した官職に復帰した程度の出世（と言えるかどうかは疑問）に留まっている。物語はそんな些細なことはいちいち書かない方針なのであろうか。強いて言えば、摂津守（上国、従五位下相当）を兼任している点、官位はともかくとして物質的に

はかなり潤っているのかもしれない。⁽⁷⁾

同様のことが右近の将監（つねみつ？）にもあてはまる。惟光・良清以外に源氏の須磨下向に付き従ったのが、この右近の将監（伊予介（常陸介）の子、紀伊守の弟）である。本来、空蟬とのかかわりからすれば、小君（空蟬の実弟）こそ源氏の供人となるべきであった。その小君の離反を際立たせるために、あえて葵祭の折に仮の随人となった右近の将監が唐突に登場しているのである（葵・須磨・滯標・関屋・松風の五巻に登場）。彼は須磨退去に際して、源氏側の人間ということでも官職を剝奪されたらしく、

中に、かの御禊の日仮の御随人にて仕うまつりし右近将監の藏人、得べきかうぶりもほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官もとられてはしたなければ、御供に参る中なり。

（三二六頁）

と失意のうちに供の一員に加わっている。そして帰京の後には「かの賀茂の瑞垣恨みし右近将監も靱負になりて、ことごとしげなる随人具したる藏人なり」（三滯標卷122頁）とはなやかな官職を得ている。そのことは松風巻でも「かの解けたりし藏人も、還りなりにけり。靱負の尉にて、今年冠得てける」（四二七

頁）と繰り返し語られており、光源氏一派の代表として脚光を浴びているのである。しかしながら藏人に復帰したのは当然であらうし、靱負の尉（従六位上相当）くらいでは、以前よりも良い待遇とは言えまい。かろうじて叙位（従五位下）を得たことだけが報奨であった。

それに比べて源氏から離反した小君（帚木・空蟬・夕顔・関屋の四巻に登場）など、関屋巻で右衛門佐（従五位下相当）となっており、それが源氏帰京以前に得た職であるとしても、両者の官職上の比較においては必ずしも信賞必罰になっていないように見える。もちろんそれは血筋の違いなのかもしれないが、源氏が離反者に積極的な報復を行っていないことを読み取っておきたい。それによって寛大な為政者としての光源氏が浮き彫りにされるわけである。

こうなると源氏の信賞必罰は、具体的な官職の上下ではなく、源氏の心情における距離の遠近ということになるのではないだろうか。官職は低くても、源氏の側近であることが供人にとつて最も重要なであろう。物語はそれを、

その弟の右近将監解けて御供に下りしをぞ、とりわきてなし出でたまひければ、それにぞ誰も思ひ知りて、などてす

こしも世に従ふ心をつかひけんなど思ひ出でける。

(三関屋巻171頁)

と、源氏に背いた側の後悔として語らせている。⁽⁸⁾

六、惟光の活躍——梅枝巻の解釈をめぐって——

ところで惟光は、物語登場の最後において「惟光の宰相の子の兵衛尉」(五梅枝巻187頁)のごとく突然宰相(正四位下相当)となっている。梅枝巻において光源氏は三十九歳であるから、惟光はそれより少し上(同年齢と見る必要はない)、おそらく四十歳前半位であろうか。それが大宰大貳(正五位上相当)の子として異例の出世か否かも検討しなければなるまい(ただし惟光の実父が大宰大貳かどうかは不明瞭)。それにしても四十歳そこそこの宰相昇格というのはやはり異例ではないだろうか。もっとも梅枝巻では惟光の息子が出ているだけであり、決して惟光自身が登場しているわけではない。それにもかかわらずわざわざ惟光の名をあげているのは、一つには惟光の子供達も源氏・夕霧一家に奉仕していることを説明するためであろうし、もう一つには惟光が公卿にまで出世していることを読者に明示するためであろう。この記事によって、惟光は安心して物

惟光の役割

語から姿を消すことができるのである。

しかしながら惟光の最終的な宰相就任は、必ずしも(乳母子の徳)とばかりは断言できない。それ程惟光にとって宰相は破格な地位だからである。そうすると別の側面、言い換えれば少女巻において惟光の娘が夕霧の第二夫人になっており、その子供の将来を見通した上で、意識的な母方の格上げがなされているとは考えられないだろうか。というよりも少女巻以降、惟光の乳母子としての実質的な役割はもはや終了していると思われるからである。

惟光同様に実名で表記された上で、光源氏の腹心の部下として活躍する従者に源良清がいる(ただし呼称の全用例は11例であるし、若紫・花宴・須磨・明石・遷標・少女の六巻にしか登場していない)。彼の場合は決して乳母子ではなく、「源姓」(明石巻)であることから源氏の血縁者とも想像される(藤壺と王命婦の關係に類似)。そうでなくてもかまわないのだが、良清の場合は若紫巻で「かく言ふは播磨守の子の、藏人より今年かうぶり得たるなりけり」(二167頁)と紹介されて以来、「思ひいたらぬ隈なき良清、惟光」(二花宴巻86頁)、あるいは「良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊びたまふ」(三須磨巻47頁)

のごとく、源氏の部下の双壁として惟光と並記されている。続いてこの良清と惟光を比較して考えてみよう。

須磨流謫において「良清朝臣、親しき家司にて、仰せ行ふもあはれなり」(三三二頁)とある点、また兩者並記の場合、良清が先に記される(和歌の順も良清↓民部大輔↓前右近将監)ことから、惟光よりやや上位に位置付けられていると思われる。大宰大貳と播磨守の息子であるから、出自にそれ程大きな差はあるまい。あるいは良清は播磨近辺の情報通であるから、それによって主導権を握っているのかもしれない。その縁で明石入道からの手紙は良清宛に届けられるものの、結局明石の君とのパイプ役は惟光に回ってしまう。良清は惟光のように源氏の私的恋愛の奉仕をしないわけで、同じく側近とはいえ、兩者には役割分担があるのかもしれない(もちろん明石の君の場合は、かえって良清には任せにくかったはずである)。

源氏の帰京後は、「良清も同じ佐にて」(三濤標巻122頁)と衛門佐(従五位下相当)に任命されているものの、以前少納言(従五位下相当)だったのだから、右近の将監と同様に必ずしも優遇されているとは断言できない。少女巻に至って、良清も「上の五節には良清、今は近江守にて左中弁なるなん奉りけ

る」(四少女巻17頁)と娘を五節の舞姫に奉っており、ここでも惟光との対比が構想されていた。その際は既に殿上人(正五位上相当の左中弁)の立場にあり、その点からしても良清の方がより貴族的なイメージを付与されているのではないだろうか。ただし良清は、それが物語における最高位であった。その後順当に進めば参議昇格も夢ではなからうが、しかし物語はもはや彼の動向を語ろうとはしない。

なお五節の舞姫の処遇をめぐることは、源氏は惟光の娘の方を典侍に推薦しており、心情的にはやや惟光に軍配があがっている。それこそが〈乳母子の徳〉であろう。しかしながら前述のように惟光の宰相昇格までもそのラインで説明することは難しい。その点についてはやはり夕霧が惟光の娘を選択したことが、最終的な兩者の明暗を分けたと考えたい。つまり梅枝巻における惟光は、源氏の乳母子という以上に夕霧の義父として据え直されているわけで、この場合は〈乳母子の徳〉よりもそちらを優先して考えるべきであろう。そのためか少女巻では惟光を「父主」(四132頁)と呼称しており、惟光自身も夕霧との結婚に「明石の入道の例にやならまし」(同133頁)といった野心を抱いているのである。その時点において良清との比較はもはや無

意味になつてしまふ。

七、乳母子の諸相

最後に乳母子の性別について考えてみたい。乳母は本来的には女に限られるけれども、乳母子の方は男女共に存在する（そこから逆に後の「乳父」が派生したのかもしれない）。まず養君が男の場合、女の乳母子は邸内（含宮中）の世話を受け持ち、男の乳母子は邸外（含む恋愛）を担当するということで、男女どちらの乳母子もそれなりに養君に奉仕できるわけである。現に光源氏の場合、男の乳母子惟光と女の乳母子大輔命婦が登場している。また惟光の姉妹たる少将命婦もその可能性が高い。一方、女の養君に関しては、女の乳母子が主体であり、男の乳母子が直接奉仕する機会は少ない。だからといって存在しないというわけではなく、例えば『宇津保物語』にあて宮の乳母子（これはた）が登場しているし、『源氏物語』では浮舟の乳母子（大徳）が確認されている⁽¹⁰⁾。

特に男の養君に対して男の乳母子は、成人した養君の腹心の部下として公私に互る世話をするなど、乳母に較べると行動範囲が相当拡大されることになる。そのためもあって、養君をめ

ぐる乳母と乳母子の対立も生じてくる。これは乳母間の対立の延長線上、つまり乳母Aと乳母Bの子供といった継子苛め的な構図（西の京の乳母と右近など）よりも、養君をめぐる実の母子の対立である場合の方がずっと多い。邸内では乳母、邸外では男の乳母子といった役割分担があつてしかるべきなのだが、そのような理想的な関係はむしろ皆無に近いようである。

『落窪物語』における道頼の乳母と帯刀の例を見ると、乳母は養君のために良かれと思つて独断で結婚相手を決めてしまふが、それに対して帯刀は出家すると脅してまで結婚を阻止している。その帯刀を踏まえて造形されている惟光と大式乳母の場合も同様であり、夕顔怪死事件の処置に際して惟光は、「少将命婦などにも聞かすな。尼君ましてかやうのことなど諫めらるるを、心恥づかしくなんおぼゆべき」（一夕顔巻143頁）という光源氏の意向を受ける形で、母や姉妹に秘密を知られないように配慮して行動しているのである。

その意味で養君は、乳母子に本心をさらけだせる程の絶対的な信頼をおいていることになる。それを西郷信綱氏は「朋輩」（乳兄弟？）という語で説明しておられるのだが、乳母子と養君が乳母の乳を共有しているという考えが幻想にすぎないこと

は既に論じた。⁽¹¹⁾やはりここはあくまで乳母子の論理としてとらえておくべきであろう。惟光は単なる従者ではなく、特に源氏のプライベートな恋愛において重要な役割を果たしていることを押さえておきたい。しかしその惟光ですら、藤壺事件に関しては全く蚊帳の外でしかなかった⁽¹²⁾。また六条院完成後は、もはや乳母子の役割は終了しており、第二部の世界に再び姿を現わすこともなかった。惟光もまた、多くの乳母・乳母子同様に、黙って物語から姿を消してしまうのである。

〔注〕

- (1) 西郷信綱氏「情事と乳母子」『源氏物語を読むために』(平凡社)昭和58年1月。西郷氏は夕顔巻における惟光の活躍を指摘された上で、「さてどうやら首尾をとげたあと惟光が、自分が手に入れようと思えばできたのに、それを主人にゆずり「心ひろさよ」などと思ったりするあたりも、乳母子ならではの面目である。この人物の生きがいのいいのは、もっぱら上下の縦の關係に規定された官給の随人とは異なり、朋輩としての横の關係をもちながら主人の忍び歩きの案内をつとめているからだと思う」(74頁)と論じられている。同様のことは熊野健一氏も述べておられるが(『源氏物語の従者』『時代と習俗』勉

誠社源氏物語講座5・平成3年9月)、それだけならば源氏に明石の君を譲った良清にもあてはまるわけで、必ずしも乳母子の特性とは断言できない。その点柳井滋氏は、「このあたりに、源氏と供人たちの主従關係の微妙なところがうかがわれるのである。全人格的な支配を受けているわけではない。源氏の行動に対する理解や人柄に対する信頼があつて、随従している」と従者論的に述べておられる(『源氏の供人』『源氏物語の思想と表現研究と資料』武蔵野書院古代文学論叢十一・平成元年7月)。また今井源衛氏は「主人への献身的な奉仕——というよりむしろ愛情と要領のいい好色とが惟光像を楽しくさせる不可欠の要素であり、それに加えて頭がよく、女房たちを手玉にとる腕がある」と惟光の個性を強調しておられる(『従者たちの役割』『源氏物語への招待』小学館・平成4年4月)。

(2) 吉海「乳母に関する諸問題」文学語学119・平成元年1月、同「平安朝における乳母子の諸相」國學院雑誌96・2・平成7年2月参照。

(3) 吉海「平安朝の乳母達」国文学研究資料館紀要15・平成元年3月参照。

(4) 鈴木宏昌氏「源氏物語における乳母子の位置——橋姫の巻における弁の君の場合——」むらさき18・昭和56年7月。

(5) 吉海「源氏物語」夕顔巻の物語設定——乳母のいる風景——」國學院雜誌86—9・昭和60年9月参照。

(6) 近世の源氏絵などには源氏と惟光が並んで覗いている構図が多いのだが、身分差を考慮すると惟光と一緒に見ているとした方がよさそうである。少なくとも惟光の視線や心内は物語中に一切認められない。『落窪物語』の垣間見でも惟成は「留守のとのゐ人や見つくと、おのれもしばしすのこにをり」(新大系22頁)と見ていないし、『夜の寢覚』でも乳母子の行頼と一緒に覗いていない。『虫めづる姫君』の場合は右馬の佐と中将が一緒に覗いているようでもあるが、この場合二人は友人であり決して主従ではなかった。

(7) 鳥田とよ子氏は、惟光が左京大夫兼摂津守であった点に着目され、兼家室となった時姫の父藤原中正(従四位左京大夫兼摂津守)をモデルとして想定しておられる(「光源氏と惟光」大谷女子大学紀要21・昭和61年9月)。また夕顔巻で「大夫」(124・138・144頁)と呼ばれていることに関しても疑問を抱いておられる。なるほど光源氏の乳母子とは言え、二十歳前半くらいで従五位下に叙せられるのは異例であろう。その意味では「惟光朝臣」(同110頁)という表記も問題ではないだろうか。あるいはこの「大夫」や「朝臣」は家令に対する敬称として用いられているのかもしれない。なお夕顔巻をパロディ化

している『狭衣物語』でも、惟光をモデルとする狭衣の乳母の子道成は式部大夫に設定されている。

(8) 末摘花を見捨てて大宰府へ下向した侍従も、後に「いましばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしう思へる」(三蓬生巻165頁)と後悔している。なお右近の将監の場合、「かの」を冠して語られることが多く、一つの典型的登場人物としてとらえることができよう。

(9) 『落窪物語』の惟成にしても惟光程には出世しておらず、物語の最後でやっと左少弁であった。歴史的に見ても、花山天皇の乳母子藤原惟成(五位摂政)や、白河天皇の乳母子藤原顕季(正三位修理大夫)ですら宰相にはなっていない。下って後白河天皇の乳母子藤原成範が正二位中納言になっているくらいである。天皇の乳母子と言えどもその程度であるから、まして源氏の乳母子ではやはり限界があるわけである。また物語における男君の乳母子は、養君が青年期(恋愛・結婚期)を過ぎると、どうやら活躍の場を喪失してしまうようである。現実的に考えても、乳母子がそれなりの官職につくと、以前のように側近として常時付き従うことはできなくなるはずである(受領になればなおさらのこと)。惟光の場合は、少女巻で摂津守になったのがそれに相当するのではないだろうか。

(10) 吉海「浮舟の周辺——乳母のいる風景——」國學院雜

誌89—6・昭和63年6月参照。

(11) 吉海「平安朝における乳母子の諸相」國學院雜誌96—

2・平成7年2月参照。

(12) 惟光の登場には何らかの法則があるのかもしれない。

惟光が仲介役となったのは、夕顔・紫の上・明石の君であるが、花散里訪問の御供にも登場しており、また蓬生巻で末摘花とのかかわりも補完されている。葵の上周辺に姿を見せないのは、惟光の活躍する場がないことのみならず、むしろ左大臣側が惟光を快く思っていないとも考えられる。六条御息所や朝顔姫君とのかかわりも皆無であり、原則的には高貴な女性との交渉には無用の人物らしい。その他、空蟬に関しては小君の存在、末摘花に関しては大輔命婦という別の仲介者が存するので、やはり惟光の出番はないのであろう。藤壺の場合は、もちろん描かれざる部分で暗躍している可能性もないことはないが、それよりも惟光にも知られてはならない密事と考えておきたい。

(追記) 乳母が複数存在するのであるから、光源氏の乳母子

も惟光以外に複数存在しても不思議はない。それにもかかわらず男の乳母子として惟光しか存在しないのは、描かれざる部分において惟光が乳母子の地位を勝ち得たのではないだろうか。その結果、「例の惟光」という表現

が定着することになるのであろう。

(本学助教)